

## 特集／途上国の首都機能移転

# コートジボワール二都物語——アビジャンとヤムスクロ

原口武彦

### ●アビジャン市の誕生

フランス領植民地コートジボワールの総督府がバンジェール・ヴィルからアビジャンに移されたのは一九三四年のことである。それ以来、一九六〇年の独立後も一九八三年にヤムスクロに遷都が決定するまで五〇年間アビジャンはコートジボワール国の首都にとどまっていた。そして法制的に内陸のヤムスクロに遷都が決定してから二〇余年を経た今日でも実質的にはこのアビジャンが経済的にはもちろん政治・行政的にも中心的な役割を担っている。

一九世紀末、西アフリカの植民地拡張競争の中で、フランスはまずアビジャンの東方五〇キロの海岸グラン・バッサムに内陸進出のための拠点を設定する。グラン・バッサムの海岸には、総督府の庁舎（現在は博物館）や植民地時代、仏領西アフリカの貿易を一手に担っていたCFAO（フランス西アフリカ会社）の建物の廃墟が今も残っている。一九〇〇年に当地に黄熱病が流行したことで総督府はラギューン（潟湖）を越えた内陸のバンジェール・ヴィルに移

される。この町の名は、一九世紀末、西アフリカ内陸部を単独で踏査したフランス人探検家であり、コートジボワール植民地の初代総督にも就任したバンジェールに因んだものだ。

アビジャンは二〇世紀初頭、わずか人口一四〇〇〇人のエブリエ族の小さな漁村に過ぎなかった。そのアビジャンは一八九四年以来、内陸のオート・ヴォルタ（現ブルキナファソ）に向かう鉄道の起点として選ばれ、鉄道工事が開始されて人口は増加し始めたが、それでも総督府が移転してきた一九三四年当時の人口はわずか一万七〇〇〇人であった。

アビジャン市の飛躍的発展が始まるのは一九五〇年以降のことである。その直接の契機となったのは一九五〇年のヴリディ運河の開通によるアビジャン港の開港であった。それまで大型船が停泊できる港を有していなかったコートジボワールはアビジャン港の開港で、熱帯産品のコーヒー、ココア、木材などの輸出が拡大し「象牙の奇跡」と称せられたほどの高度経済成長を一九七〇年代末まで持続する。

一九四八年、わずか四万八〇〇〇人であったアビジャン市の人口は一九五五年にはすでに一〇万人、一九六七年には四〇万人を越えて植民地時代、仏領西アフリカの総督府が置かれていたセネガルのダカール市をしのぐ旧フランス領西アフリカ最大の都市にまで発展した。一九四八年から一九六三年までの一五年間、実に年平均一・五％という急激な人口成長を記録している。さらにアビジャン市は成長を続け、市街地は植民地時代のラギューンを挟んで植民者街とアフリカ人居住地が対峙していた中心部から外延的に拡大し、今日では人口二五〇万人を越える大都市となった。

### ●ヤムスクロへの遷都法案

コートジボワールの首都をこのアビジャンから内陸のヤムスクロに移すという法案が国民議会でも可決されたのは、一九八三年三月のことである。当時のアビジャン市長でもあった地元エブリエ族出身の国会議員ジュロ氏はウフェ・ボワニ大統領に「自分の責任で提案すること」という条件で事前に了解を取り付けた上で、この遷都法案を

国民議会に提出した。一九六〇年の独立以来、五期続けて大統領の地位を保持し、今や国父的存在であるウフエ・ボワニ大統領の生地であるヤムスクロに首都を置くことは歴史的意義があること、アビジャン市の都市機能が近年の急激な膨張で限界に達し、麻痺寸前の状況にあることが提案理由であった。すでに一九七〇年代までの高度経済成長から一転して経済不況にあえいでいたこの時期に付加的財政支出を伴う遷都はいかなるものかと危惧する声もあがったが、この遷都法案は可決される。この法案が可決されるや、ウフエ・ボワニ大統領は自分が所有する二五〇〇ヘクタールの果樹園を首都建設のために無償で提供することを表明する。

ウフエ・ボワニ大統領が「自分の責任」でことを運べと、この法案提出に条件をつけていたこともあって、この法案が可決された時、ジュロ市長はまさに時の寵児となり、ウフエ・ボワニの後継者候補として頭角を現した。しかし調子に乗りすぎたのかその後、汚職事件で失脚してしまう。

### ●聖地ヤムスクロ

私がヤムスクロを初めて訪れたのは一九六八年のことである。当時、人口一万人足らずの小さな町に過ぎなかったヤムスクロが、ウフエ・ボワニ大統領の生地であるという特権的地位を示す景観は二つのみ。なぜか私に日本の銭湯の壁にかけられた大き

な富士山と伊豆の海の風景画を思い起こさせた青色の塀に囲まれたウフエ・ボワニ大統領の広大な私邸（その後、さらに立派なものに建てかえられ、私邸なのか公邸なのか外部者には分からなくなった。後述）と、台湾の農耕隊（国連における台湾の議席維持のために、米国の資金で農業技術援助としてアフリカ各国に派遣されていた）が維持管理しているウフエ・ボワニ大統領が所有する広大な米田ぐらいだった。

一九八三年の遷都法案可決後に私はヤムスクロ市を再訪して驚いた。まず、一九八〇年代初めに完成したばかりのアビジャン市郊外からの片道二車線の高速道路。現在もまだ全長一四七キロにとどまっているが、やがてヤムスクロまでの残りが建設される予定である（すでにこれから二〇年以上経過しているが、いまだに着工の気配はないが）。高速道路が終わると残り一〇〇キロ余りは片道一車線の旧街道となるが、現地人の慣れた人ならアビジャン・ヤムスクロ間は車で二時間半もあれば十分である。

ヤムスクロ市の入り口の標識が見えた途端、そこから道路は突如、空港の滑走路を彷彿させる片道四車線はあろう広大な道路に変わる。その道路の両側には街灯のポールが二、三メートルおきに立ち並び、市の入り口から見ると、それは巨大なアーケードのようだ。人っ子一人通っていないこの広大な道路を鶏が一只より横切っていく。牧童に引き連れられた数十頭の牛が

のっしのっしと道路の真ん中を行進していく。この道路を数キロ走り市の中心に達しても、車も人の数もこの広大な道路にふさわしい数には達しない。

この幹線道路ほど広くはないが、市内には縦横に舗装道路が走っている。大統領邸もすっかり様変わりして一キロ四方もある広大な敷地は高さ数メートルの白壁の塀で囲まれ、数カ所ある門は緑色に塗られた大きな鉄の扉に金色の把手をあしらって荘厳さを演出している。正面のワニを放し飼いにしている堀越しに「本殿」が見渡せる。その正面玄関の両側には狒犬ならぬ金箔の羊（ボワニは羊を意味する）が鎮座し、ここがウフエ・ボワニの館であることを示している。市の中心から一〇数キロはなれたサバンナの原野にはジェット機も離着陸できる三〇〇メートルの滑走路を備えた空港も完成していた。市のはずれにはゴルフ場やプールを備えた豪華なホテルが建設されていた。その名もオテル・プレジダン（大統領ホテル）。空港の管制塔を大きく広げたようなあたりの最上階（一五階）のレストランからは全市が、さらにそれを越えて果てしなく続くサバンナの原野まで一望することができる。ここから見る夜景は、東京のそれのような色とりどりのネオンの光はないが、街灯の光の放列が黄白色一色で整然と縦横に走っている光景は見事である。

## ●ウフェ・ボワニの政治的権威

一九八三年の遷都法案が可決される以前にすでにこれだけの都市建設が、当時まだ一〇万人たらずのこの小都市で行われていたのである。それはまさにウフェ・ボワニ大統領の権勢の象徴であった。かくして一九八五年の大統領選挙ではウフェ・ボワニはなんと一〇〇%の得票率を得て六選を果たす。政府機関紙『フラテルニテ・マタン』紙（一九八五年一〇月二九日付け）は、全国五三八八投票所で行われた投票で有権者の九九・九八%、三五一万六五四二人（棄権者はわずかに七二七名）が投票し、まさに文字通り全員がウフェ・ボワニに信任票を投じるといふ古今東西、前代未聞の椿事を報じたのである。その真偽はともかく、ウフェ・ボワニの権勢は極限に達していたことは事実であろう。その五年後、政治民主化の嵐の中で、彼は初めて対立候補ローラン・バボ（現大統領）を迎え討つことになるのだが。

しかし遷都法案が可決された後、今日まで二〇余年、遷都は実質的には進展しなかった。国会議事堂、最高裁判所、大統領府をはじめとする各省、各国大使館などはいずれもアビジャン市にとどまったままで今日に至っている。

唯一、一九八五年以降実施された大プロジェクトはカトリックの大聖堂（通称バジリック。正式名称は平和ノートルダム寺院）

の建立だけであった。ウフェ・ボワニが私財四〇〇億CFAフラン（当時の換算率で約二〇〇億円）を投じわずか三年間の突貫工事で完成し、一九八九年にこのカトリック寺院はヤムスクロ市郊外のサバンナの原野に忽然と巨大な姿を現した。彼が私財を投じたことになっているが、実際の建設にあたったのはこの国の建設局であった。この寺院を設計したのはレバノン系イボワール人の建築家ビエール・ファクリ氏である。彼には競合相手がいた。フランス大使館筋から推薦を受けたというフランス人建築家アンリ・ボティエ氏であった。ボティエ氏の案はアフリカの円形の伝統的な家屋（*gond*）の形を模した、いかにもアフリカ風の高さ一六〇メートルに達する巨大な寺院であった。ウフェ・ボワニはこの案を見て、こんな巨大なコンクリート製の建造物は西アフリカ観光を事業としている地中海クラブに任せておけばいいと一蹴したという。これを聞いてファクリ氏は、ウフェ・ボワニはフランス人の考えるアフリカらしさの中にとどまることを拒否し、より普遍的なものを求めているものと理解した。

では最終的に採用されたファクリ氏の案はどのようなものであったのか。それはバチカンのサン・ピエトロ寺院のまさに複製であった。座席の足元から冷たい空気が流れてくる空調付きの大聖堂の座席の数は七〇〇〇。イタリアから輸入したという大理石が敷き詰められた聖堂前の広場では一〇万人の集会が可能であるという。これまたフランスから輸入したという聖堂のステンドグラスに描かれたキリストと、その使徒たちの絵の中の使徒の一人にウフェ・ボワニとおぼしき黒人が加えられていること以外、この聖堂がアフリカに存在していることを感じさせてくれるものは皆無である。聖堂の尖塔は本尊のサン・ピエトロ寺院のそれを二六メートルも超える一五六メートルもあり、これで文字通り世界最大のカトリック寺院となった。

この大聖堂建設については、着工時から欧米のジャーナリズムの間から非難の声が上がった。国家が対外債務の累積に苦吟している最中に、たとえ大統領の私財とはいえ、このような非生産的な投資は許されないうわけである。このような非難に対してフォロゴ情報相（当時）はそのような非難は人種的偏見に基づくもので、ヨーロッパの数々の大寺院が建設された時代、ヨーロッパの一般大衆の生活は今日のイボワール人の生活より貧しかったはずであるとやり返した。

サバンナの原野に聳え立つこの大聖堂の威容を眺めていると、ウフェ・ボワニにまつわる逸話を思い出す。植民地時代、フランス政府の国務大臣としてフランスに滞在していた時、フランスの名優ジャン・ギャボワールに戻った時、植民地政府の高官さへ乗っていない、当時のアメリカの最高級

## 特集／途上国の首都機能移転

車キヤデラックを購入して持ち込み、植民地官僚たちの輦轡を買ったという。独立に際して、「富裕の中の隷属よりも貧困の中の自由」を選択してフランスと訣別していったギニアのセク・トゥーレに対し、「飢えたる者に自由はない」として、フランスとの協調路線をとってきたウフェ・ボワニは、この世界一の大聖堂をヤムスクロに建立することで、フランスやヨーロッパを見返してやろうとしたのだろうか。

この大聖堂の完成後、ウフェ・ボワニは早速、ローマ法王庁にこの大聖堂の寄進を申し出た。さすがの法王庁もこの申し出にはたじろいだ。結局、さらに大聖堂の周辺に学校と病院を建設するという条件で法王庁はこの寄進の申し出を受諾する。かくして一九九〇年九月、ローマ法王も飛来してこの大聖堂の「魂入れ」が行われた。そして一九九三年二月七日、コートジボワールの三三回目の独立記念日に八八歳の生涯を閉じたウフェ・ボワニは、一連のさまざまな葬儀の後、翌一九九四年二月七日、コンコルド機で飛来したフランスのミッテラン大統領、シラク・パリ市長、バラデュール首相らが名を連ねる八〇名のフランス代表団をはじめ国家元首二四名を含む各国の代表団が列席した大聖堂での鎮魂ミサでめでたく昇天する。

### ●聖地から首都へ(?)

親元を離れ当時の植民地首都バンジエ

ル・ヴィルの中学校に入学したウフェ・ボワニは、そこでまもなく洗礼を受ける。以来彼は生涯敬虔なカトリック教徒の姿を纏い続けたが、大聖堂の建立を思い立った晩年には、彼の信仰は揺るぎ始めていたらしい。先祖返りというべきか、彼の最後の愛人の実母が教祖である新興のアフリカ系の一宗派にかなり傾倒し始めていたという。

大聖堂は建立されても、ヤムスクロ市がコートジボワールの首都としての実質的な機能を發揮し始める兆しは一向に現れなかった。ヤムスクロ市は、国父ウフェ・ボワニが生まれ眠る聖地でしかなかった。そのヤムスクロが政治的機能を發揮し始めたのは、皮肉なことに二〇〇二年九月十九日、コートジボワールで内戦が勃発、北部領土が反乱軍の支配下に入り国が二分されてからである。

ヤムスクロ市は、南北の分裂によって政府軍が支配する南部の北辺に位置することになった。南北の和平交渉は、国家の再統一に向けて、内戦発生一〇日後の二〇〇二年九月二十九日のガーナの首都アクラで開催された西アフリカ諸国経済共同体首脳会議を皮切りにさまざまな機関、政治家たちの仲介で、フランスおよびアフリカ諸都市を舞台に数回にわたって繰り返されてきたが、本年三月、ブルキナファソの首都ワガドゥグで西アフリカ経済共同体の新議長、コンパオレ大統領の仲介で行われた当事者の直接対話の結果、反乱軍側の代表者ソロ書記

長がバボ大統領のもと首相に就任したこと(恐らくは)最終決着を見たのであるが、この間ヤムスクロは両者の交渉の場としてたびたび利用されるようになったのである。例えば昨年三月、コナン・バニ首相(当時)の提唱で紛争当事者のバボ大統領、反乱軍のソロ代表に、大統領選に出馬が予想されるベディエ元大統領、ワタラ元首相を加えての首脳会談の場に選ばれたのは、ヤムスクロであった。また二〇〇六年四月、政府軍と反乱軍の軍代表の武装解除のための交渉もヤムスクロで開催されている。

北部を支配する反乱軍がコートジボワール第二の内陸都市ブアケを本拠地としたことで、ヤムスクロは政府軍側の領内にあるとはいえ、ブアケから南下してわずか一〇〇キロの位置にあり、アビジャンが政府軍側の本拠地になることによって、期せずして地理的に両者の間をつなぐ中心点となったのである。これから両軍の武装解除、大統領選挙の実施までには紆余曲折があるだろうが、それが完了するまでは、ヤムスクロ市は両者を包摂する、まさにコートジボワールの首都の地位を保つことになるだろう。そしてその後も国父ウフェ・ボワニが生まれ、眠っている単なる聖都ではなく、南北に分断されたコートジボワールの再統一の象徴として、ヤムスクロは首都の地位を確立することになるのかもしれない。

(はらぐち たけひこ／獨協大学経済学部非常勤講師)